

神仏分離研究の現代的意義

——神仏関係史の再構築を目指して——

代表者・司会 櫻井治男

コメンテータ 鷺見定信

近世・近代の神仏関係の位相

阪本 是丸

一 神仏判然（神仏分離・以下、一般に馴染んでいるので「神仏分離」の語を用いる）の多様性から見る神仏習合の多様性 ①石清水八幡宮、北野天満宮など「宮寺」の神仏分離 ②延暦寺と日吉社の神仏分離 ③興福寺と春日社の神仏分離 ④輪王寺と東照宮の神仏分離 ⑤氷川社・鷲宮社などの神仏分離 ⑥「秋葉山」の神仏分離 ⑦その他、夥しい神仏分離の事例 これらの神仏分離の事例から、神仏分離以前の「習合形態」の歴史の多様性を考えることにも意味があろう。

二 発表者の神仏分離及び神仏習合に関する基本的理解に対し、最近、『東海近代史研究』三〇（二〇〇八）所収の田村貞雄氏より「秋葉山略縁起と近世国学者の付会」なる論考で、「初歩的な問題だが、阪本氏は権現と「神」との語義を錯覚している。神仏習合・本地垂迹のもとでは、権現は神なのである。…本地垂迹説への氏の基本的理解に問題がありそうだ。」といった批判を戴いた（拙稿、「秋葉山本宮秋葉神社小考」へ

の批判）。「権現は神なのである」と田村氏はいう。まさに、その通りである。「中古以来某権現或は牛頭天王之類其外仏語を以神号に相称候神社不少候何れも其神社の由緒委細に書付早々可申出候事」（慶応四年三月二八日）とあるように、維新政府（の一部）も「権現」が「神仏」のうちの「仏教」教説という「仏・菩薩」ではなく、「権現」が「神」と同義語であることぐらいは承知していたであろう。まして、かの延喜式に大洗磯前葉師菩薩神社や酒列磯前葉師菩薩神社もあれば、八幡大菩薩宮崎宮や八幡大菩薩宇佐宮も記載されているのだから、権現は当たり前のこと、「菩薩」号であっても「神」であると思慮されたとしても不思議はない。そもそも、田村氏は「秋葉信仰は、愛宕信仰と同じく火に対する信仰と習俗を基礎としており、近世以来全国各地に普及している。その基盤には、古代以来の修験道と山岳信仰がある」と自ら述べているように、発表者が指摘しているのは、その「古代以来の修験道と山岳信仰」には「カミ」観念は無関係ではなく、それが存在していたからこそ成立したのでは、ということである。

三 発表者の神仏分離研究の基本姿勢であるが、たとえば、秋葉山での神仏分離は、カミと仏教、そして修験道が絡まった、一見非常に特異な例に思えるが、実は、そこ―神仏分離の舞台―に存在する「宗教者」たちの、或る者から見れば宗教的無節操、また或る者にすれば「宗教的寛容性」と評価が二分される「日本人の宗教性」の特徴が象徴的に見て取れるのではないのか、ということである。

それに気付いた鷺尾順敬は、かの北野社の神仏分離に際し

パネル

て、北野社の松梅院など菅原姓吉見氏が、それまでの「法体」奉仕を「いなしこめしこめきぶつのみちもてつかえまつりしを」いとも簡単に捨て去って平然としていることに対し、「この一事で、祠官三家以下社僧の態度が知らるゝのである。彼らの内一人も自らこれを異まなかつたのである。……諸坊に、仏教関係の図像等が多かつたが、住持が仏教の信仰がなかつたから、各自ら意に任せて売却したものである。」と評している。

かかる事例は、興福寺、永久寺等枚挙がない。だが、大宮・氷川神社や金刀比羅宮などホトケであれ、カミであれ、己の信ずる道のために出処進退を決した宗教者も少なからずいたであろう。

この発表が、神仏分離を招き、そしてその神仏分離の場を様々な形で生き抜いてきた日本人の「宗教性」と生活、そしてその歴史を少しでも実証的に解明できる参考になれば幸甚である。

宗教都市宇治山田における

神仏分離の諸問題

牟 禮 仁

伊勢神宮とその鎮座地である宇治（内宮）・山田（外宮）は、仏法・仏事忌避の神祇信仰の伝統性を継承する典型的事例とみられているが、一方、古代後期以降仏法者を引きつけ、また各

地から人々の参詣するセンター・聖地、宗教都市としてあった。そこでの神仏関係には、①信仰②思想③歴史・制度④空間・建物⑤物象⑥人⑦儀礼・祭儀などのレベルで多様な様相があった。そこには二つの志向性があった。神宮側にあつては、マイナス（禁忌・判然・隔離・分離・排斥・排除）の、また神宮側、寺院・僧侶側にあつてはプラス（接近・共存・結合・混濁・習合・融合）の志向性とは併存した。

古代における神仏関係は、奈良時代伊勢大神宮寺が建立されたことに示される神仏接近に始まるが、以降、忌詞・「屏仏法息」（伊勢神道書）など神仏隔離の理念が定まる。一方で、神宮祠官の仏法信仰が十世紀末〜十二世紀には浸透する。また僧侶の参詣、神前読経が盛んとなり、天照大神の本地仏を十一面観音・大日如来とする思想が広まる。

中世では、「隔離」と「習合」とが併存しつつ、祠官側の「習合」の信仰内面化が進むとともに、式年遷宮遂行の勧進に僧侶の関与や修験の参詣・関与も深まる。

近世、人口約五万人のマチの実態は「寺町」といえる。寺院数の最多は、山田では三七一、宇治は七八であつた。①宗派の内訳は、明治二年には三一五ヶ寺のうち浄土宗一〇六・禅宗一五七・真言宗三八・天台宗六・真宗六と、浄土宗と禅宗が圧倒的であつた。③規模の別を寺号にみると、院・庵・軒・坊・堂などが五〇％と高い。寺院の多くは明確な由緒を有さず、それらは中世後期以降に由来し、近世初期の寺請制度などにより勧進聖（浄土系）・修験者などが定着化したこと、檀那寺より檀家をもたない祈禱寺の割合が多いことが推される。そして「隔